埼玉工大紀要
No. 5 (1987)

八丈島樫立方言の記述
(その3)

青 柳 精 三

第4章 樫立方言の詞類別の記述
(上)

文中での位置・機能・活用変化に基づいて15の詞類を立てる。以下に，詞類別に文表現に重点をおいての記述を行うことにする。

1. 名 詞

1) 概 要

ここでいう名詞とは，以下のような語をいう。MT会話より幾つかを書き出してみる。

サワジー	沢之助爺
キルイ	衣類
ロベ	フェニックス・ロベレニー（既述）
ショイニンソク	葬式の時に棺をかつぐ係
コーヨーデマ	公の仕事をした場合の手間賃
オクジ	奥
アズ	境界
コワリエ	(高年層でコワリー)。木を切れる段階の切替畑。
ママ	崖（海浜の崖を除く）
コシ	海岸へ落ちてゆく急斜面と崖
タマイシ	波にもまれて球状になった石。石垣(オリ)・地場(ジバ)《土台石》・無縁仏の墓の標石などに用いられる。
ヒローノクサ	道端・海浜・木を切る前の段階の切替畑（フッチロ）などに自生している雑草。刈って牛の飼料とする。ヒ

	ローについては名確な語源意識がない。
ヒャーリジ	入り道
テヤー	人たち。自分が仲間に入ってない複数の人たち。共通語の“手合い”のような軽蔑的な語感を必ずしも伴わない。
サレコツ	長い間，雨風にさらされた骨。
ワレ	私。話し手が自己を言う指示語。
オミャー	あなた。対等または目上の聞き手を言う指示語。
オランシャー	あの人たち。あれらの物。指示語。
ウク	あそこ。場所を言う指示語。

2) 指示語

名詞のうちで指示語は，会話の場面展開の上で重要な働きをするので詳説しておこう。

a. 1人称指示語

話し手が，自分自身または自分を含め自分側に組み入れられる人たちを指示する名詞である。

ワレ《私》

文中で独立して

ダレモ　オビエトァ　ヒトワ　ワレ　トリノ　ワケ　ダンヌー　ワ。

誰も知っている人は，私一人のわけだろう。(M→T)

無活用助詞と結合して

マタ　ワレン　シテ　ゴージャレ。

また私に話してみてください。(女・明中→筆者。筆者が書き取った樫立方言を話すようにすすめる)

ワレモー　コワクモ　アニモ　ナカロァガ。

私も恐くも何もなかったが。(M→T)

活用助詞と結合して

オ。　ワレダラー。

はい。私だ。(女・明中→筆者。路上で人に後から，オーイ　ダレドァ　《おーい，誰だい》と呼びかけられた時，振りむきながらこういう，と説明して言う)

ワ

主格表示の無活用助詞と結合して

ワガ　イッテモ　ヨケ　ガー。

私が行ってもいいが。（男・大→電話の相手）

ワガ　マルブトワ　マズ。

私が死ぬとまず〔当時のことを知っている人は一人もいなくなる〕。（M→T）

属格表示の無活用助詞と結合して

ワーガ　イエモ　サンニンモ　キタラ　ラー。

私の家にも3人も〔兵隊が〕来たっけ。（M→T）

ワガ　コドモワ　サンジュー……サンジューロクデ　カレ。

私の〔一番下の〕子供は，30……36だ。（女・明中→筆者）

所有物を表示する機能名詞ガ《～の（もの）》と結合して

コノ　チャワ　ワガ　カ。

このお茶は私のか。（女・明後→女・明後）

コリャ　ワガダラ。

これは私のだ。（女・明後→女・明後）

ワラ(ー)《私は》

無活用助詞ワ《は》と融合したもの

ワラ　ヌー　ベツニ　タノミ　イコァ　シトジャ　ナッケ　ガ。

私はね，別に頼みに行った人ではないが。（M→T）

ワラ　ソノ　ウエデ　クソァ　カロァ　ドァイテ　サー。

私はその上で草を刈ったのだからさ。（M→T）

ワラ

主格表示のノと結合して

ワラノ　ミチケトァドァ　ガ。

私が見つけたのだが。（M→T）

ワラノ　ミチケトァドァイテ。

私が見つけたのだから。（M→T）

ワイ

無活用助詞ト，モと結合して

ˌサワジーˌトー，ˌワイト*　トンネルグチエイッテ　マチタラˈラー。

沢之助爺と，私と　トンネル口へ行って待ったんだよ。(M→T)

ワイモ　コノミャー　ヨシミツァニーカラ　ソノ　ハナショ　キットチー**……

私もこの前，義光兄〔Mの長男〕からその話を聞いてから……（T→M)

* 「ワイトよりワレトの方が純粋樫立方言である」(原稿を通読してくださった小宮才次氏による見解。氏は明治36年樫立に生まれ，島内各地域の学校長を歴任した元八丈町教育長である。以下，K. S. 氏と略記する)

** 「キットチーは末吉の発音で，以前の樫立ではキットチェーであった」(K. S. 氏)

ワイシャー《私たち》

ワレンシャー《私たち》

ワイシャーが主に使われている。1人称混数* の指示語はこの二形しかない。ワレワレも時に聞いたが共通語文脈においてであった。

オビートァ　ジャ**，ワイシャーモ。

知っていますよ，私たちも。(T→M)

* 混数という用語については8頁および9頁参照。

** 「オビートァジャよりオベートァジャが普通だった」(K. S. 氏)

ジブン《私》

ワレ系の一人称語単数形ほどは多用されていないが，ジブンを時々ワレ系と併用している人がいる。

シブンワ　タベノーニ***　タベテ　タベテ　タベテ。

私は食べないのに〔私の姉は，よく〕食べて食べて。(女・明中→筆者)

サツマ　バッカリ　タベタダ　ノァ，ムカシワ，ジブンガ　ガッコーイ　ミコトキニャー。

薩摩芋ばっかり食べたんだね，昔は。私が学校へ通う時には。(同上)

*** 「タベノーニよりカミンノァニが普通だった」(K. S. 氏)

その他，ワタˈシ，ワシ，オレも聞いたが共通語文脈においてであった。

b.　2人称指示語

聞き手（厳密には「相手」〔addressee〕と呼ぶのがよいが，慣例に従っ

ておく）または聞き手を含め，聞き手側に組み入れられる人を指示する名詞である。

オミャー　《あなた》対等または目上に対して用いる。丁寧。妻が夫を呼ぶ時にも。

オメーシャー《あなたがた》（オメャーシャー，オメャンシャーとも）*
オミャーの混数。丁寧。

* 「オメャーシャーが最も普通であった」（K. S. 氏）

オミ　《お前》対等または目下に。夫が妻を呼ぶ時にも。

オミンシャー《お前たち》オミの混数。

ウナ（ナレとも）　1. 《おめえ・てめえ》目下に。昔の人は使ったが，最近は使う人がほとんどいなくなった。ただ一人だけ今でも目下の誰に対してもウナを使う人がいるという。

2. 《お前》70歳ぐらいの人が孫とか甥とかに，親愛の情を込めて使う場合。

ウナンシャー《てめえたち・お前たち》

ウナンシャーモ　クレバ　ヨケ　ジャー。

お前たちも来ればいいよ。（男・昭初。老人が孫に言う場合の例として挙げる）

c.　3人称指示語

話し手と聞きてまたはそれぞれに組み込まれる人たちを除く，人と事物を指示する名詞である。

オラ（オレとも）《あの人・その人・あれ・それ》

オラガ　シャチョー。

あの人が社長なの？（女・大→女・明中）

オレドァ　ジャー。

あれなんだよ。（M→T）

オラー《あの人は・その人は・あれは・それは》オラと助詞ワとの融合。

オラー　シューセンチョクゴデ　オジャランヌ　ジャ。

それは終戦直後でございましょうね。（T→M）

オノ《あの・その》助詞ノとの熟合により連体詞化。

オノ　ジブン　ダランヌー。

あの時分だろう。（M→T）

オリエ(オリーとも)《あれを・それを・あれへ・それへ》助詞オ《を》又はイ《へ》との融合。

ゼヒー　オリー　シテ　タモーレー。

ぜひ　それを　して　ください。(T→M。このオリーはよく使われ,「万事をよろしく」の「万事を」にあたるもの)

オランシャー《オラの混数形》

その他アレ《あれ》,アノ《あの》,アレンシャー《あの人たち。あれなんか》も用いられている。

コラ,コレ《この人・これ》

コラ(ー),コリャー《これは》コレ+助詞ワの融合形。

コノ《この》助詞ノと熟合し連体詞化。

コリエ(コリーとも)助詞オ《を》,イ《へ》との融合。

コランシャー(コレンシャーとも)《この人たち・これら》

ウスケニ　コケニ　コレンシャー　カマワズン。

〔色が〕薄いのも,濃いのも,これ〔何束かの生糸〕を構わずに〔繰る〕(女・明中→女・明後)

ソラ(ソレ,ソイとも)《その人・それ》

ソラー,ソリャー《それは》助詞ワと融合形。

ソノ《その》助詞ノと熟合し連体詞化。

ソリエ,ソリー《それを,それへ》助詞オ或はイ《へ》との融合。

ソランシャー(ソレンシャーとも)《その人たち,それら》

ソランシャーガ　ヒルワ　アガロデ　イソガシクテ。

その人たちが昼〔=正午頃〕には〔昼食を〕あがるので忙しくて。(女・大→女・明中)

d. 場所指示語

ウク《あそこ》

ウキー《あそこへ》助詞イ《へ》との融合。

アスコ,ムコーも使われている。

ココ《ここ》

コッカラ《ここから》助詞カラとの融合。

コッチ《こっち》

コッチャン《こっちへ》助詞シャンとの融合。

ソコ《そこ》
ソキー《そこへ》助詞イ《へ》との融合。

3）機能名詞

名詞の中で，独立性が弱く，特殊な機能を示す語を機能名詞と呼ぶ。所属・割当の関係を表現する機能名詞の2種をとりあげてみよう。

ガ，グヮ《～のもの・～のこと》

名詞に直接に接尾される場合（この場合は無活用助詞としてもよい）

ウクア　カ'ツヤガ　ダロァイテ　ノァ。
あそこ〔の切替畑〕は克哉のだったからね。(M→T)

ソラグヮシャー　ダイデモ　ウグヮンドァニ。
その人の〔＝自分の〕ことさえ，誰だってああなのに。（男・昭初→女・明中。自分の仕事があるのに，ああやって手伝いに来てくれる，と感謝していう）

助詞ノを介して名詞に接尾される場合

マ,ニャー　,ワギーノガニ　ナロァ　ガ。
今は我が家のものになったが。(M→T)

オミノガン　シェー。
お前のにしろ。(女・明中が筆者に示した例文)

ゴハンガ　シブンノガガ　ハヤ。
御飯が，自分のがもう〔作るのがやっかいだ〕。(女・明中→筆者)

ガラ《～の分・のために》

直接名詞に接尾する場合

ワガ　キヨイチガラ。
私の清一分。（男・昭初が，祖母の口ぐせを真似ていう。祖母は食卓につくとまずお菜の一部を祖父の分として，上のようにとりわけたということ）

イチマンエンモ　カッテ　キ下ァダ,ラー，ニケンガ,ラー。
1万円も買って来たんだよ，二軒分。(女・明中→筆者)

助詞ノを介して接尾する場合

イクネン　ミャーカー，シブンノガラモ　オッテー　ジブンガー
幾年前か自分の分〔＝着るのを〕も織って。自分のを。（女・明

中→筆者)

イモノガラワ　オカズワ　イラナイガ　サー⤴　イモノガラ。

里芋〔の煮上げ〕にはおかずは要らないがさ。里芋〔の煮上げ〕には。(同上。この場合ガラは《分》→《ため》と表示内容の移行を示している。)

動詞に直接に接尾する場合

ジブンノ　タベロガラダケ，ミンシュクノ　モーカリガ　ノァ⤴。

自分の食べる分だけ，民宿の儲けがね。(同上。民宿ではお客に出す料理が余ったりするから，それを家の人たちが食べれば，食費が浮き，儲けだという論法)

4) 混数表示のシャー

シャーは名詞に接尾される接辞で，ンシャー・インシャー・イシャーの異形もある。シャーは共通語の《など・たち・ら・なんか》等に相当する名詞にのみ接尾される接辞である。樫立方言では，これらの共通語によって表示される内容にすべてシャー（他の異形も含め）をあてるのである。したがって，シャーの出現頻度は高く，外来者の耳を打つ。ンシャーのン，インシャーのイン，イシャーのイは口調を滑らかにするために挿入さる語音であると解される。単にシャーとなる場合は先行する名詞の末尾音が長語音かンである時である。ただし末尾音が長語音であってもンが挿入される場合もある。以下にシャー及びその挿入音がついた諸例をかかげておく。

ンシャー	シトンシャー	《人たち》
	ムコンシャー	《婿たち》
	クミアイチョーンシャー	《組合長たち》
	タイチョーンシャー	《隊長たち》
イシャー	カオイシャー	《顔など》
	カラダイシャー	《体など》
インシャー	フクインシャー	《服など》
	シトインシャー	《人たち》
シャー	ナカノゴーシャー	《中之郷など》
	タイチョーシャー	《隊長たち》
	トシサダアンチャンシャー	《敏貞兄さんたち》

次にシャーの表示内容について，次の会話文例に基づいて考えてみよう。

A：センセーカラ　オミヤゲ　アニョ　ムロワル。

B：カシンシャーヨモ　ムラッタ₁シー，キモノンシャーヨモ　ムラッタシ，マタ　ヌ，ニンギョーノ　グゥンドァ　モノモ　ムラッタシー　ソレカラ　ノァ　オチャンシャーヨモ　ムラワ₁ラー*。

A：先生からお土産に何を貰った？

B：菓子なんかももらったし，着物なんかももらったし，またね，人形の様なものも貰ったし，それからね，お茶なんかも貰ったよ。（男・昭初が会話例として言う）

＊「相当経ってから思い起こしていう場合は，ムロワララとなる」（K. S. 氏）

上の会話は，菓子が2箱，着物が3枚，人形が4つ，お茶を2罐もらった場合でもよし，それぞれが1箇ずつでもよし，あるものは1箇，他のものは複数箇の場合でもよい。

誰かが，カショ　ムラワ₁ラー。と言うのを聞いた場合，貰った菓子は1箇であるか複数箇であるかは不明である。要するに「菓子を1箇または数箇を貰った」ということがわかるだけである。しかるに，カシンシャーヨ　ムラワ₁ラー。となると情報量は幾分ふえるのである，すなわち「菓子を一箇と何か外のもの，或は菓子を数箇だけ，或は菓子数箇と何か外のもの，を貰った」となる。人称指示語の混数形にもこのシャーが接尾されるが，事情は全く同じことである。例えば，ワイシャー（ワレンシャー）では，話し手ワレは全世界に唯一人の存在で複数（狭義の複数）にはなり得ない。したがって，これらの混数形は，ワレとワレ側に組み入れられるワレ以外の人々を表現すると考えられる。カシンシャーの菓子1箇と何か外のものの場合と，ワイシャー（ワレンシャー）の場合とが同一関係を示している。このように，狭義の複数と広義の複数をも一括して混数と呼ぶとすると実情に即すことになる。したがってシャーは混数表示の接辞と定義づけられる。

2. 動　　詞

1) 概　要

本書でいう動詞とは次のような語をいう。MT会話中より幾つかとり出

しておく。なお代表形は［ɯ］で終る語幹とする。樫立方言の生活者たちは，ある動詞を文脈から離れ個別にとり出して説明しようとする時，例外はあるが通常—ɯ語幹をもってすることを考慮し，この語幹を代表形とする。

アル	ある・居る
オビエル	知る（オビールとも）
ナベル	植える
ワス	居る・来る・行く〔目下へ〕
ツレル	連れて行く。ツッテ《連れて》の形で頻用される。
オッピレコム	物を何かの中へ拾って入れる
カタドリアウ	担ぎあう
カンギャール	考える
ゴージャル	御覧になる〔目上へ〕
ツロイデル	呼びに行く
ヒッカスル	忘れる
ヒッツル	（飲物を）飲む
ブックズレル	崩れる。(ブッは強意のブッというよりは習慣的につくロぐせの接頭辞。既出のオッピレコム・ヒッツルのオッ・ヒッもこの種の接頭辞)
ブッコロブ	ころぶ
マルブ	死ぬ。（「金魚には使えるが海の魚には使えない」「人にだけしか使えない」等，意見がわかれる）
ス	為る・言う・行く・～している，等。

強意口ぐせ動詞の例を更に他の収録資料からのも含め補えば次のようなものもある。

クッキル	切る
シッツボム	しぼむ
ブッチマウ	しまう
ヒッカラマル	からむ
ブンマース	廻す
シットル	盗む
ツッタツ	立つ
ブッツァガル	下る

2）動詞の活用と活用成態

一般に活用そのものを尋ねる作業は，尋ねられる側にとって無味乾燥であり，退屈な作業を強いることになるので，筆者は自然会話や教示者の示してくれる例文から輪郭を描く程度にすべきと考えている。もちろん教示者が活用に興味を持って積極的に話してくれる場合は別であるが。樫立での収録中，一度だけ，動詞スについて一人の教示者（女・明中）が活用についての話をしてくれたことがあった。その教示者は，スがシスセソと活用するのが面白いという。すなわち次のようである。

ソコン　シー。　　そこに行きましたか。

ソコン　スー。
ソコン　スー。　　そこにいますか。

ソコン　セー。　　そこに居なさい。そこに行きなさい。
ソコン　セーー　　そこに行けば〔いいのに〕

ソコン　ソ　カ。
ソコン　ショ　カ。　　そこにいきますか。

ソコン　ソ　ワ。　　そこにいますよ。

ソコン　ソ　ワー。　　いますよー（誰々さんは）。

ソコン　ソ　ガ。　　そこにいますが。

さらに，次の注釈をつけ加えてくれた。

マーンワ　アマリ　ツカワナキャ。ムカシダ　ヨ。フルーイホ
ダンヌー　ワ　ノァ　コレア　ドーハイガ　ツコー　コトバ　ダロ
ー　ノァ。

今はあまり使わない。昔だよ。古い方だろうね。これは同輩が使うでしょうね。（スが《居る・行く》を意味する用法についての見解）

活用といってもその形態，すなわち活用形を認定する作業は容易でない。例えば，「行きましょう」にあたるイコグゥンを例にとってみよう。イコグゥンは確かにイコとグゥンの2要素からなるが，イコを活用形としグゥンを活用形に接尾される無活用助詞とするか，或いはイコを活用語幹としグゥンを活用語尾とするか問題は残る。筆者は一応前者の立場をとる

が，イコグヮンの一体化した表現性を重視し活用結合と呼ぶことにし，分離性と結合性を合わせもつ表現形式と考えるのである。また，「いらっしゃるでしょう」にあたるオジャンヌーを例にとると，オジャンとヌーとに分離可能のようではあるが，オジャンは《いらっしゃる》，ヌーは《でしょう(推量)》を表示するというのにはいささか抵抗を覚える。すなわちイコグヮンのイコの場合は，イコ自体が単独で文要素になり得る自由形式であるのに，オジャンもヌーもいずれも自由形式ではない。ここでも，筆者はオジャンをオジャルの活用形と見，ヌーを無活用助詞とは一応考えてはおくが，両者の一体化した表現性を重視し，またその密着の強さを考慮して活用融合と呼ぶことにする。活用結合・活用融合に対して，オミ　イク。《君は行く？》，イツ　オジャロ　カ。《いついらっしゃいますか》におけるイク，オジャロを独立活用形と呼ぶ。活用結合・活用融合・独立活用形を総称して活用成態と名づける。以下に，特に樫立方言において頻用されるオジャルを例にとり，主要なる活用成態を列挙し，広義の活用現象の一端を記すことにする。ただし，㊀は独立活用形，㊁は活用融合，㊂は活用結合の略号とする。

オジャル㊀（現在）

カゾクノ　シトオデモ　ツッテ　オジャル　カ，ドーダ　カ。

家族の人をでも連れていらっしゃるかどうだか。(T→M)

オジャル・ッチー㊂（伝聞／現在）

イゾクモ　オジャルッチーッテ　サー

遺族も　おいでになるそうでさ。(T→M)

オジャル・ダロー㊂（推量）

オメャーオ　オビーテ　オジャルダロー。

あなたをご存知でいらっしゃるでしょう。(女・明中→筆者)

オジャロ㊀（現在）

ゴクヨーガテラ　コッチャン　オジャロワ。

御供養がてらこちらにおいでになりますよ。(T→M)

オジャロ・グヮン㊂（勧誘／意図）

マンカラ　ミツネー　オジャログヮン　オカサマー。

今から三根に行きましょう，お母様。(女・大→女・明中。例文として)

オジャロ・イテ㊀（原因／理由）

オイデモー* ムコーカラ　オジャル　ナカマガ　ハカガ　チャーント　ウグヮン　ナッテ　オジャロイテ　ドゥグヮン　ウレシク　オジャル　カ　ノァ。

それでも，むこう〔＝北海道〕からおいでになる人たちが，墓がちゃんとああなってございますから，どんなに嬉しがっていらっしゃることでしょうねえ。(M→T)

＊「オイデモーはソイデモーと言った方がよい」(K. S. 氏)

オジャロァ㊁（完了／過去）

ハカマデモ　ツクッテ　オイテ　モラッテー　アリガタッキャ　ッテュー　コトオ　シッテ*　オジャロァ　ガ，デンワデモ。

墓までも作っておいて貰ってありがたい，ということを言っておいでだったが，電話でも。(M→T)

＊「シッテよりシテがよい。このように動詞ス(ル)を《言う》または《行く》の意味に使うのは最近の傾向である」(K. S. 氏)

オジャロァ・イテ㊀（完了／過去・理由）

ゼンイチローサンガ　ツッテ　オジャロァイテー，ソノ　ジョシダイセーオー。

善一郎さんが連れておいでになったので，その女子大生を。(女・明中→筆者)

オジャレ㊁（命令）

オチャー　アガッテ　オジャレ。

お茶をあがっていらしてください。(T→M)

オジャラ・ラ・バ㊂（条件）

テガミガ　オジャララバ　ヘンジョ　シテ　タモーリ　ヤレ。

手紙がございましたらば，返事を出してくださいませ。(女・明後→筆者。文例として)

オジャリ㊁（過去／現在）

キルイノ　ウグヮンドァ　モノ　ソノママ　オジャリ　ヤ。

衣類のようなものがそのままございましたか。(T・M)

オジャリ・ギーナラ㊀（現在の様態）

オノ　ヒトワ　イシャデ　オジャリギー　ナラ　ヨー。

あの人はお医者さんでいらっしゃるようですよ。（男・昭初。文例として）

オジャラ・ラ㊙（過去）

ガッチリドァ　シトデ　オジャララ。

がっちりした人でございました。（T→M。このオジャルは聞き手に対する丁寧表現として使われている）

オジャラ・ララ㊙（過去／回想）

ハッキリ　ワカッテ　ヨク　オジャラララ　ノァ。

はっきりわかってようございましたね。（T→M）

オジャラレ㊙（過去）

タクシーガ　ナッケイテ　バスデカ　オジャラレ。

タクシーがないのでバスでおいでになりました。（男・昭初。文例として。この文表現には，「簡単に」「あっさりと」「気軽に」したという気持ちが少し入るようである）

オジャ(リ)・ンナカ㊙㊟（否定／現在）

オランシャーワ　マダ　オジャリンナカ。

あのかたたちはまだおいでになりません。（女・大。文例として）

オジャ(リ)・ンジャラ㊙㊟（完了の否定）

マーダ　ヨッテ　オジャンジャラ。

まだ酔っておられません。（男・明後→筆者。老人会で）

オジャ(リ)・ンジャラ・ラ㊟㊙（過去／回想の否定）

シューカイニ　イカレドーニ，ダーレモ　オジャンジャラ，ラー。

集会に行ったけれども，誰もおいででなかった。（男・昭初。例文として）

オジャ(リ)・ンジャロァ㊟㊙（否定／過去）

ヨバッテ　トオ　アケテミタ　ライドン　オジャンジャロァ　ジャ。

呼んで戸を開けてみたけれども，〔あなたは〕いらっしゃいませんでしたよ。（女・明後→女・明中）

オジャ(リ)・ンジャリ・ギーナラ㊙㊟（否定の現在の様態）

ホカノ　ナカマワ　オジャリンジャリギーナラ。

他の人たちはおいでにならないようです。(女・明中→女・明中)

オジャラ・ライ・ギーナラ㊟（過去の様態）

キニー　キャーッテ　オジャラライギーナラ。

昨日，帰っていらっしゃったようです。(男・昭初。文例として)

オジャ(ラ)ン・ヌー㊟（推量）

キチンートシトァ　オコツデ　オジャランヌー　ジャ。

きちんとしたお骨でございましょうね。(T→M)

オジャ(リ)・ンジャンヌー㊟㊞（否定推量）

クゥンドァニャー　マダ　シマジュー　サガシテモ　イッピキモ　オジャンジャンヌー　ワ。

このように〔立派なもの〕にはまだ島中さがしても一匹もお目にかからないことでございましょう。(男・昭初→筆者。民宿の食堂で食卓に供した魚について誇らしげに)

オジャッ・タ㊟（過去）

ソノ　カラダワー　ホネバッカリン　ナッテ　オジャッタ　カー。

その〔遺〕体は骨ばっかりでございましたか。(T→M)

オジャッ・ト(ッ)チー㊟（完了の中止形）

コキー*　オジャットッチー　クゥンシテ　ソノ　ハナショ　シヤラ　ラー。

ここへおいでになって，こうしてその話をなさいました。(女・明後。例文として)

＊「コケーが古い言い方である」(K. S. 氏)

オジャリ・タク㊞（願望）

オメャーワ　イツ　クニー　オジャリタク　オジャロ　カ。

あなたはいつ東京へいらっしゃりたくおいでですか。(女・明後。例文として)

オジャリ・ナガラ(ニ)㊞（並行）

コキー　オジャリナガラニ　アニョ　シテ　オジャッタ　カー。

ここへいらっしゃりながら，何をしておいでしたか。(女・明後。例文として)

オジャロァ・ショアテ㊀（意図／目的）

オラー　トーキョーイ　オジャロァショアテ，ケーワ　トンメテニ　オキ　ヤララ。

あのかたは，東京へおいでになろうと，朝早く起きられました。（男・大。文例として）

オジャララ・ッチエテ㊀（過去伝聞による理由）

タノモサンモ　ソコデ　オジャララッチエテ　タノモサンニ　ハナシ　タロァ　ˈガー。

頼母さんも，そこで〔骨を埋めた場所に〕おいでだったそうだから，〔役場でも〕頼母さんに話したが。（M→T）

オジャラ・レル㊁（可能）

クグゥンニ　シケドァニ　オジャラレルカ　ノァ。

こんなに時化なのにおいでになれるかねえ。（男・大。文例として）

オジャラ・セル㊁（使役）

クグゥンニ　コギール　トキニ　オジャラセテワ　ダメダラ。

こんなに寒い時においでにならせては駄目だ。（男・大。文例として）

オジャラ・ズ㊁（否定）

オメャーノ　カニャードァ　シトノ　ココデ　ヌクマッテ　オジャラズン　ノァ，ドキエ　オジャッˈター。ウチー　キャーッタ　ˈカー。

あなたの家内になる人は，ここで〔＝こたつに入って〕暖かくしていらっしゃらないでさ，どこへいらっしゃったあ？　家へ帰ったか。（女・明中→筆者。オジャラズンのンは無活用助詞ニの異形）

3）活用成態の放射と収斂

筆者は，動詞の活用現象を，代表形からいわば放射状に活用成態が飛び出していくというようなイメージでとらえている。また，その諸活用成態は，その任務を終了した時には，代表形に帰巣する鳥の群のように考えている。すなわち放射と収斂の形態変化を活用ととらえたい。この放射と収斂は，一定の枠の中にとじこめられた数箇の活用形の静的な羅列(paradigm)として存在するものでなく，放射の行く先の限度をある程度は規定できて

も，更にその先の活用成態がありうるかもしれぬという可能性を秘めたものであると考える。その様子をオジャルを例にとり図示した私案を次頁に示す。方言生活者の心理にもできるだけ即したものが望ましいが，これは内観能力のすぐれた教示者の協力が得られないと困難な問題であろう。

3. 形 容 詞

形容詞の独立活用成態のうち，ヨケ《良い》，オッカシケ《粗末な》，のように—ケで終るものを形容詞の代表形とする。ヨッキャ，オッカシキャなどのような—(ッ)キャで終る独立活用成態は，ヨッキャ ノァ↗《いいねえ》のように文末詞が続く場合を除き，言い切りになることが多いから，この—キャの活用成態をもって，代表形とする方法もあろうが，—キャはあまりにも判叙・断定の表示性が強いので，できるだけ中立的なものが望まれる。またヨイ，オカシーのように [i] で終わる成態も現われるが，—i 形は，—ケ形に比して使用頻度が低いし，言い切りとして用いられた場合（例えばウマイ↙）には，感声的に使われることが多いので不適当であろう。したがってこの [i] で終る活用成態を代表形としない。

以下に，形容詞の例語を若干かかげておこう。

エズケ*	やりにくい
オッカナケ	恐い・よく茂った
カヤシケ	かわいい・おとなしい
ボーケ	大きい・多い・年が上だ・背が高い
ネッコケ	小さい・背が低い
ジャージケ	きれい・美しい・立派な
ハジガマシケ	恥ずかしい
ヤッコケ	柔かい
フルシケ	古い

* エズケの第1語音の具体音相は [je] [ie] [ie] 等である。

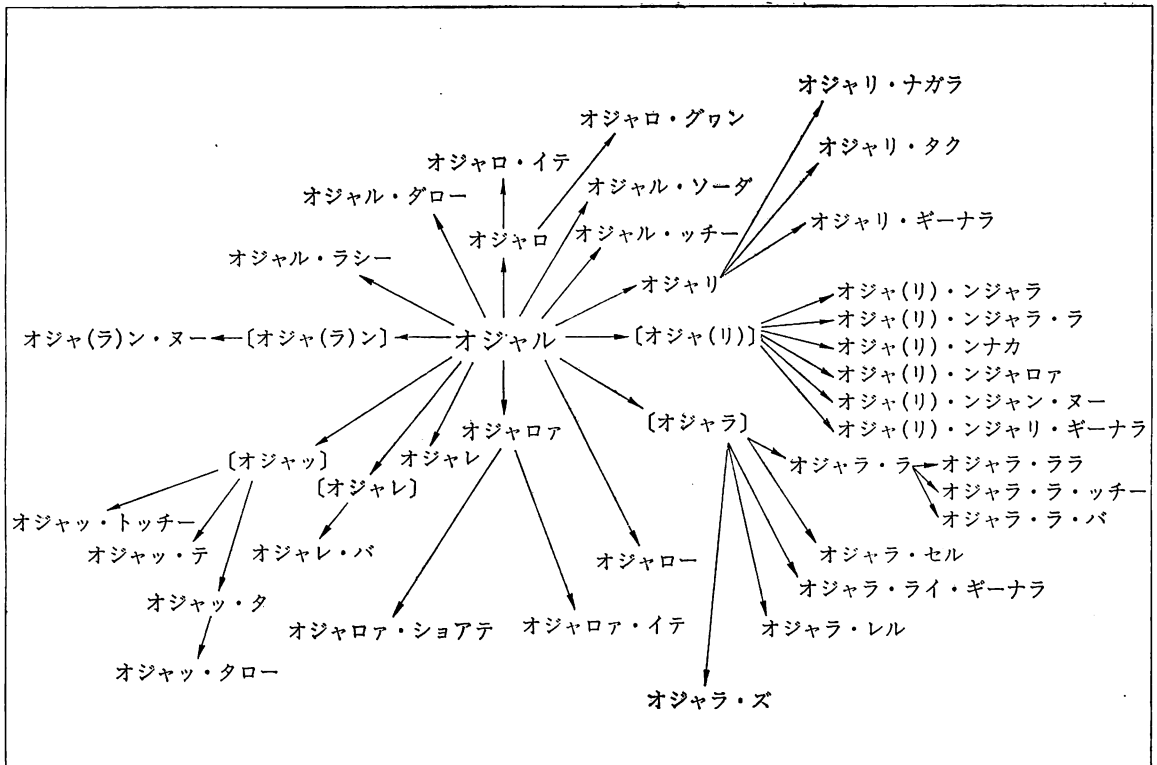
形容詞の活用成態

形容詞の活用成態の主要例をボーケ《大きい》によって示してみよう。文例は筆者が言い，教示者に認められたものである。

ボーケ㊙（代表形）

ウクニ　ボーケ　キガ　アロ　ジャ。

あそこに大きい木があるよ。


オジャル
オジャロ
オジャロ・イテ
オジャロ・グワン
オジャル・ダロー
オジャル・ソーダ
オジャル・ッチー
オジャル・ラシー
オジャリ
オジャリ・ナガラ
オジャリ・タク
オジャリ・ギーナラ
〔オジャ(リ)〕
オジャ(リ)・ンジャラ
オジャ(リ)・ンジャラ・ラ
オジャ(リ)・ンナカ
オジャ(リ)・ンジャロァ
オジャ(リ)・ンジャン・ヌー
オジャ(リ)・ンジャリ・ギーナラ
〔オジャ(ラ)ン〕
オジャ(ラ)ン・ヌー
オジャロァ
オジャロー
オジャロァ・ショアテ
オジャロァ・イテ
〔オジャラ〕
オジャラ・ラ
オジャラ・ララ
オジャラ・ラ・ッチー
オジャラ・ラ・バ
オジャラ・セル
オジャラ・ライ・ギーナラ
オジャラ・レル
オジャラ・ズ
オジャレ
〔オジャレ〕
オジャレ・バ
〔オジャッ〕
オジャッ・トッチー
オジャッ・テ
オジャッ・タ
オジャッ・タロー

ボーケ・イテ㊀（理由）

オミガ　コドモワ　ボーケイテ　シンピャー　ナッキャ。

君の子供は大きいから心配ない。

ボーキャ㊁（判叙・断定）

コノ　タマイシワ　ボーキャ。

この玉石は大きい。

ボーク㊁（連用）

オミャーガ　コドモモ　ボーク　ナララ。

あなたの子供も大きくなりました。

ボーク・テ㊀（連用）

オミャーガ　クルマワ　ボークテ　オジャランヌー　ワ。

あなたの車は大きいことでございましょう。

ボーカリ・ギーナラ㊂（様態）

オラガ　コドモワ　ボーカリギーナラ。

あの人の子供は大きいようだ。

ボーカ・ッチー㊂（伝聞）

オラガ　コドモワ　ボーカッチー　ヤー。

あの人の子供は大きいということです。

ボーカン・ヌー㊂（推量）

オノ　キキャーワ　ボーカンヌー　ワ。

あの機械は大きいだろう。

ボーカラ・ラ㊂（過去）

オノ　キキャーワ　ボーカララー。

あの機械は大きかった。

ボーカラ・バ㊂（条件）

オノ　キキャーガ　ボーカラバ，ワイト　ドーシン　サゲテ　イコグッン。

あの機械が大きいなら私と一緒に持っていきましょう。

ボーイ・ダロー㊀（推量）

オノ　コドモワ　ボーイダロー。

あの子供は大きいでしょう。（ダローは共通語と違って目上の聞き手に対しても使う）

ボーカ・ロー㊟（推量）

ソランシャーノ　コドモワ　ボーカロー。

その人たちの子供は大きいでしょう？

ボーカロァ㊟（過去）

マンワ　ナケレドーニ，ソノ　キガ　ボーカロァ　トキワ　モッチャクダラ，ラー。

今はないけれども，その木が大きかった時はじゃまだった。

ボーカン・ニャー㊟（断定）

コノ　イヌメワ　ネッコク　ナッキャ。ボーカンニャー。

この犬は小さくないよ。大きいとも。

—イ形の代りに，あるいは異形として—Cjæ: 形となるものがある。若干の例を示す。

オサニャー	幼い
ニャー	無い
ツリャー	辛い
ヤンゴトニャー	尊い
ミズリャー	みっともない
フキャー	深い
チキャー	近い
カチャー	固い
スッピャー	酸っぱい
ニギャー	苦い

アツケ・オ《熱いのを》の融合形として，アツキエ（高年層ならアツキー）がある。

アツキエ　タベノート　マズイダラ，コラ。

〔煮上げ芋の〕熱いのを食べないとまずいんだ，これは。（女・明中→筆者）

4. 名形詞

名形詞とは名詞的形容詞という名称を縮約したものである。これに活用助詞ダラもしくはドァが接尾されたものを基本形とみなし，形容動詞とする方法もあるが，筆者はダラ，ドァを接尾させない形態そのままが疑似名

詞的な機能を不完全ながら示すことに着目し名形詞と名づける。以下に名形詞をかかげる。

モッチャク	じゃま・やっかい・めんどう
ガンコ	がんこ
ヤッキャー	やっかい
ドッチリ	沢山
ヘン	変
チャーヘン	大変
ジョーブ	丈夫
ヘタ	下手
ジョーズ	上手
ヤ	嫌

名形詞は後述の活用助詞ダラ等と結合して用いられるが，名形詞自体が語形変化をしない。以下はモッチャクの文例（筆者作成・教示者承認）である。

クグゥンニ　ムラッテ　モッチャク　ダラ。
こんなに貰ってじゃまだ。(判叙・断定)

クグゥンニ　ムラッテ　モッチャクドァ　コト　ダラ。
こんなに貰ってじゃまなことだ。(連体)

クグゥンニ　ムラッテ　モッチャクニ　ナロ　ガ。
こんなに貰ってじゃまになります。(連用)

ウグゥンニ　ムラッテ　モッチャク　ダララー。
あんなに貰ってじゃまだった。(過去)

ウグゥンニ　ムラッテ　モッチャク　ダリギーナラ。
あんなに貰ってじゃまそうだ。(様態)

クグァンニ　ムラッテモ　モッチャクデ　ナッキャ。
こんなに貰ってもじゃまではない。(否定)

モッチャク　ダラバ　ブッチャレ。
じゃまならば捨てろ。(条件)

ウグゥン　ムラッテ　モッチャク　ダッチー　ヤー。
あんなに貰ってじゃまだそうだよ。(伝聞)

ウグゥン　ムラワバ　モッチャク　ダンヌー　ワ。

あんなに貰えばじゃまだろう。(推量)

スグゥン　シッカリ　ムラッテ　モッチャク　ダロァ　ガ。

そんなに沢山貰ってじゃまだった。(過去)

モッチャク　ダレドーニ　サゲテ　オジャレ。

じゃまですけれども持っていってください。(譲歩)

クグゥン　シッカリドァト　モッチャク　ダロー　カ。

こんなに沢山だとじゃまだろうか。(推量)

名形詞の中には，名詞と相通じやすいものとしにくいものとがある。モッチャクは前者の場合で，次例はモッチャクが名詞に移行したものと考えることができる。

ステル　モッチャクモ　ナケ　ジャ。

捨てる世話もないよ。(女・明中→筆者。筆者にふるまってくれたニョアゲイモ《茹でた里芋》を，帰る時に持っていってくれると，自分はもう食べないから捨てる世話がなく助かる，ということ)

一方，ヘン《変》，ヤ《嫌》，ジョーブ《丈夫》などは，名詞と相通ずる可能性は少ない。すなわち，ステル　ヤモ　ナケ　ジャ。とは言えないであろう。

5. 副　　詞

本書でいう副詞とは次のような語を言う。

ゴラゴラ	速く
ハラ	もう〔ハヤ・ハ(ー)・モハヤも少し聞かれる〕
マダ	まだ
マー	まあ
ナルホド	なるほど
ゼヒ	ぜひ
キット	きっと
タブン	たぶん
タイチエ(タイチー)	たいてい
マタ	また
ドーセ	どうせ

チャント	ちゃんと
ハッキリ	はっきり
チート	ちょっと
ウスウスニ	うすうすに
ズーット	ずうっと
ダイタイ	だいたい
ダンダン	だんだん
ナカナカ	なかなか
ズツ	かわるがわる・定期的に・ちょくちょく
クヮ	ほかならず・なんと・とにかく・ひょこっと，等
ヌー（ヌ，ノーとも）	また・やはり，等

共通語からは，用法の類推ができないズツ・クヮ・ヌーの3つについて文例を挙げる。

ズツ

ヒローノ　クソァ　ズツ　カロァ　モンドァ　ジャ。

〔牛の飼料とする〕雑草を日に1度ずつ刈ったもんだよ。（M→T。《定期的に》）

ヒトガ　ズツ　マルッデ　シマッテ……

人がつぎつぎと死んでしまって……（男・明後→筆者）

ホーゲンノ　センセーニ　フタリデ　ズツ　イッショーケンメーニ　ハナシタロァ　ガ。

方言の先生に二人でかわるがわる一生懸命に話しましたが。（女・明中→筆者）

クヮ

ワクノ　ナミャーデ　クヮ　ダガダ　テーバ　ワカルダンニャー。

〔糸繰りの〕枠の名前で〔外のものを見なくても〕誰のかと言えば分かるだろうさ。（女・明中→筆者）

アシニ　アニョカ　ヘンドァ　モノガ　アタロイテー，ミトァニ　クヮ　ホネン　ニトァイテ。

足に何か変な物が当たるので，見たら，なんと，骨に似ていたので。（M→T）

ソリエ　クヮ　オコァ　ワケ　ドァイテ。

それを，とにかくちゃんと，埋めた訳だから。(M→T)

ハラー　コツギャー　クゥ　キャーロニ。

もう帰ろうという時に，骨の中へひょこっと〔巡査が遺留品の硬貨を入れたんだよ〕(M→T)

ヌー(ヌ，ノーとも)

ワラ　ヌー　ソノ　シトー　イキテシル*　トキワ　ノー　オビーナッカ。

私は，また，その人を生きている時は，やはり知らないよ。(M→T)

オミャーワ　ヌ　ドコノ　シトダ。

あなたは，そもそも，どこの人です？(女・明中→筆者)

ハラ　ヌ　スゥンダンヌー　ガ。

もう，やはり，そんな〔年齢〕でしょうが。(T→M)

＊「イキテシルトキワよりイキテショトキワの方がよい」(K. S. 氏)

6. 形 副 詞

単独で副詞としての機能を持つと同時に活用助詞ダラ等と結合して名形詞と同様に機能し得る語を形副詞と呼ぶこととする。次のような語が形副詞となる。

クグゥン	このように（コグゥンとも）
クゥン	こう（コァンとも）
ウグゥン	あのように
グゥン	ああ（ゴァンとも）
スグゥン	そのように（ソグゥンとも）
スゥン	そう（ソァンとも）
ドゥグゥン	どのように（スグゥンとも）
イロイロ	いろいろ
チーット	少し
シッカリ	たくさん

樫立の方言生活において頻用される副形詞の１つクゥンを例にとり用法を示す。

コリャ　タイヘンダ。コリャ　ハジメテダ，クゥン　イエズケワ。

これは大変だ。これは初めてだ。こうやりにくいのは。(女・明中→筆者。ほとんど独り言に近い。糸繰りをしながら，繰りにくい生糸の束にぶつかって)

ミカンワ　タベラレズ，メガ　シッツボッデー↗。　ソノ　タベルト　スッパクテ　'クゥーン　シテイテ　'クゥーン　ダス　ドァジャ，クチカラ　クゥーン　シテ。

蜜柑は食べられない，目がしぼんでしまって。その，食べるとすっぱくて，こうしていて，こう出すんだよ，口からこうして。(女・明中→筆者。蜜柑の酸味が苦手で，無理して食べる時の様子を語っている。'クゥーンと強勢と引き伸ばしが加えられているのはプロミネンス)

ドァガ　クゥンドァ　フクインシャーガ　イクラカ　ホネニ　クッツキミッテ　アロァ　ガ　ノァ。

だが，こんな服などが幾らか骨にあちこちくっついていたがね。(M→T。クゥンドァと言いながら，自分の着ている服をさわっている)

クグゥン・クゥン・ウグゥン・スグゥン・スゥン・ドゥグゥンは，その様態指示の機能に着目し，様態指示語と呼ぶことができる。

その他，コーユー《こういう》，ソーユー《そういう》，コー《こう》，コンナ《こんな》なども散発的に得られているが，全体的に見て非常に僅かである。

7. 名副詞

副詞と名詞の両機能を有する語をいう。いずれの機能を示すかは，文脈に依存する。次のような語を名副詞とする。

ミンナ	みんな（メンナ，ミナとも）
ゼンブ	全部
マン	今
キエ，キー，ケー	今日
キニエ，キニー，キネー	昨日
アス	明日
マイネン	毎年
コノミャー	この前(連体詞コノと名詞メャーの熟合したもの)

コニャーダ	このあいだ（コノと名詞アイダの熟合したもの）
テツ	1つ
ニカイ	2回
サンニン	3人
イチンチ	1日

名副詞の用いられている例文を若干示す（筆者作成・教示者承認）。

マンワ　イソガシケイテ　クリャーニ　ショグァン。（名詞機能）

今は忙がしいから，夕方にしましょう。

マン　オーカゴーイ　イッテ　クロ　ワ。

いま大賀郷へ行ってくるよ。（副詞機能）

キーワ　イチンチガ　ナガケ　ジャ　ノァ↗。

今日は1日が長いねえ。（名詞機能）

キー　ミツニー　オジャルッチー　ヤー。

今日三根へおいでになるそうですよ。（副詞機能）

8. 連体詞

成分後置* の場合を除いて連体詞は修飾される名詞の前に通常そのままおかれる。連体詞の語数は極めて少いものと思われるが，気づいたものを列挙しておく。

* 第5章で詳述する。

オノ	あの・その
アノ	あの
ソノ	その
コノ	この
ドノ	どの

用法については説明を要しないと思うが，次の2例を挙げておく。

ドノ　ワクガ　オミガ　カ。

どの〔生糸を巻きとる〕枠がお前のか。（女・明中→女・明後）

ソノ　フルシケ　ワクガ　ワガ　ダラ。

その古い枠が私のだ。（女・明後→女・明中）

9. 連体副詞

連体詞と副詞との機能を兼ね備えている語を連体副詞という。現在のと

ころ次の1語がこれにあたると認められる。

オンナシ《同じ》

オンナシの用いられている文例を挙げれば次の通り。

ソノ　ヤマザキッテカ　オミャーシャーガ　ミツケヤロァ　ヒトノー
オンナシ　ブタイノ　ヘータイガ……

その山崎とか，あなたたちが見つけられた人の同じ部隊の兵隊が……（T→M）〈連体詞機能〉

イチオー　ニカイモ　デンワシタラ　ヒドーク　ウレシガッテ　ノァ，
オンナシ　イックイックニー，ソーユー　チャント　ハカマデモ　ツ
クッテ　オイテ　モラッテー　アリガタッキャ　ッテュー　コトオ
シッテ　オジャロァ　ガ，デンワデモ。

一応2回も電話したらひどく嬉しがってね，おなじ行くにしても，そういうちゃんと墓までも作っておいてもらってありがたいっていうことを言っておいででしたが，電話でも。（T→M）〈副詞機能〉

なおオンナシは，活用助詞ダラと結合することができるので名形詞としての機能も有する。（筆者作成・教示者承認）

オミガ　ボーシト　ワガトワ　オンナシダラ。

おまえの帽子と私のとは同じだ。

コレワ　ワガト　オンナシデ　カレ。

〔君は違うというけれども〕これは私のと同じだ。

10.　無活用助詞

従来の国文法でいう助詞のうち，文末助詞を除いたものの機能がここでいう無活用助詞の機能とほぼ一致すると考えられる。主な無活用助詞とその各々が用いられている文例を以下に示す。

ワ《は》（ぞんざい発音ではァ）

サワジーワ　オメーシャーモ　オビータンヌー　ジャ。

沢爺さんはあなたたちも知っているでしょうね。（M→T）〈名詞に後接〉

ワギーカラ　コッカラ　ヒキアゲテ　スグワ　ノーキョーイ　ツトメ
テ　オジャルッティーヤーッテ　ハナシ　ダラ。

私の家から，ここから引き揚げてすぐは，農協へ務めていらっしゃるという話です。(T→M)〈形副詞に後接〉

ソイデ　オメャーシャー,ガー　アスコエワ　ハチマンヤメャー　ウメヤリ　ノァ。

それで，あなたがたが，あそこへは〔つまり〕八幡山へお埋めになったのですね？（T→M)〈他の無活用助詞に後接〉

ソイデ　ソノ　コロモ　ソノ　ハナショ　ダレカラカ　ウスウスニクッン　キカラレドーニ　ハッキリシタ　コトー　オビーワ　サズ。

それで，その頃も，その話を誰からかうすうすにこう聞きましたけれども，はっきりしたことを知りはしません。(T→M)〈動詞に後接〉

コグッンシテ　ママカラー　シテアルトワ　アシニ　アニョカ　ヘンドァ　モノガ　アタロイテー……

このようにして崖から〔草刈りを〕していると，足に何か変なものがあたるので……（M→T)〈シテアルトワのワは，シテアルトでもよいわけであるがワがよく後接される〉

融合形には次のようなものがある。

ジャ←デ＋ワ　ワギー,ジャー《我家では》

ニャ←ニ＋ワ　コーヨーデマグリャーニャ《公用手間ぐらいには》

オビャ　←オビ《帯》＋ワ

ショージャ←ショージ《障子》＋ワ

ガ《が》(主格的)

ヨシミツガ　,メーンナ　ロビエ　ナベトァ　ダラ。

義光が〔その切替畑に〕みんなロベを植えたんだ。(M→T)〈名詞に後接〉

トーキョーノ　コトボァ　キコガ　コワクテ。

東京の言葉を聞くのが〔大変で〕疲れて。（女・明後→女・明中)〈動詞に後接〉

ガ《の》(属格的)

ヨシハルクンガ　ヤマノ　アズ　ウグッン　オメシャガ　ヒャーッテオジャル'ジャー。

義治君の畑の境界を，あのように，あなたたちが入っていらっしゃいますね。(T→M)

ノ《の》(属格的)

ワラー↗ワギーノ　ナカマ　ヨリー↘　フタツキハン　オソクー↘……

私は家族より2月半遅く……(T→M)

ノ《が》(主格的)

ソノ　ボーシノ　アロァ　トコロマデワ　シェギマデー↘……

その帽子のあった所までは，端まで……(M→T)

ニ《に》(ぞんざい発音ではしばしばン)

トンネル　グチニ　キテ　ミチケトァ　シトア　マチロ……

トンネル口に来て，見つけた人は待て。(M→T)〈到達点を表示〉

コノ　ウエノ　ダンニー↘　ソノ　ボーシンシャーワ　アロァダラ。

この上の段に，その帽子なんかはあったんだ。(M→T)〈存在場所表示〉

イツカ　トンメテガタニ　ノァ↗，クルマデ　ツッテッテ　アゲロイテ。

いつか朝早くね，車で連れていってあげますから。(T→M)〈時点表示〉

ミタ　イジョーワ　ケーサツニ　ハナサズニャドァ　ガ。

〔お骨を〕見た以上は警察に話さなければだが〔＝話さなければならない〕。(M→T)〈与格的〉

イエバ　ゼッペキニ　ママニ　チカケ　ホー↗。

つまり，絶壁に，崖に近い方？(T→M)〈近接基準表示〉

イシャニー　シチョーチョーニ　いカラ　ケーブノー↘　イチバンノ

ウエノ　シトニ　サンニン　オジャロァ　ドァイテー。

医者に，支庁長に，それから警部の一番の上の人に3人おいでになったから。(M→T)〈列挙〉

マニャー　ワギーノ　ガニ　ナロァ　ガ。

今は我家のものになったが。(M→T)〈変化の到達点を表示〉

ゼヒ　オメャーニ　ダイタイ　コノヘン　ダラト　ヨー　オシーテ

モライタクテサ，イッカイ↗。

ぜひ，あなたに，だいたいこの辺だとよう，教えてもらいたくてさ，一回。(T→M)〈受動的表現においての動作主を表示〉

ハカミャーリニモ　イッテ　サー。

墓参りにも行ってさ。(T→M。行為の目的を示すニ)

キャーロニ　ジュンサガ　クヮ　アー　ココン　アル　ゾーテ　シテ，ミチケテー。

帰りがけに〔私ではなく〕巡査が，ああ帽子がここにあると言って，見つけて。(M→T)〈動詞で示される行為が起こりかけた時点を表示〉

ヤッコケガガ　カモニ　ヨケ　ジャ。

柔いのが食べるのにいいよ。(女・明中→筆者)〈動詞に示される行為の価値判断の基準とすることを表示〉

既述のようにワとの融合形がみられる。

ニャ←ニ＋ワ　ソントキニャ《その時には》

マルブニャ《死ぬには》

オ《を》(先行音がン・イ・長語音の場合ヨとなることが多い。先行音がオの時ヲ[wo]となった1例〔男・明中〕がある。)

ヤクバデ　ボーサンオ　ヨンデ　サ。

役場で坊さんを呼んでさ。(M→T)

コンド　ゴチソーヨ　ダソ　ワ。

今度ご馳走を出すよ。(女・明後→女・明後。老人会で)

ソイジャー　ミカンヨ　アガレ。

それでは蜜柑をあがってください。(女・昭初→男・昭初及び女・明中)

ソノ　カイヨ　ツクッテ　ウグヮン　トシサダアンチャンシャーガ　ウグヮニ　マイネン　オジャル　ジャー。

その会を作って，あのように敏貞兄さんたちが，あのように毎年〔東京へ〕おいでになりますよ。(T→M)

あから　ハコヲ　ハコー　カタドリアッテー……

それから箱を，箱を担ぎあって……(M→T。ヲにおいて強勢があ

るためかヲ[wo] と発音されている)

オは後接される先行詞の末尾音に応じて数種の融合形を生ずる。

—Ca+o → —Coʌ̆*

サツマ＋オ → サツモァ《薩摩芋を》

キリバ＋オ → キリボァ《切葉を》

* Cは子音を示す。

但し，先行語音がカの場合はクァ [k̟a] となることもある。

ナカ＋オ → ナコァ／ナクァ《中を》

—Ca+o → Co: (例は少い)

スガタ＋オ → スガトー《姿を》

オチャ＋オ → オチョー《お茶を》

—Co+o → Co:

ハコ＋オ → ハコー《箱を》

シト＋オ → シトー《人を》

その他，ハコ＋オ → ハコーウ [xa̤ko:ŭ]《箱を》，イモ＋オ → イムー [imɯ:]《里芋を》の例を1例ずつ得ているがこの種の融合は少いものと思われる。

—Ce+o → $C_J$ie̤(老年層)／—C_Ji:(高年層)*

コメ＋オ → コミエ／コミー《米を》

タネ＋オ → タニエ／タニー《種を》

オケ＋オ → オキエ／オキー《桶を》

ロベ＋オ → ロビエ／ロビー《ロベを》

ソレ＋オ → ソリエ／ソリー《それを》

ユテ＋オ → ユチエ／ユチー《湯手拭いを》

フデ＋オ → フジエ／フジー《筆を》

但しテ＋オ→テー《手を》の1例がある。

* C_J は破擦音を含め口蓋化系の子音を示す。

—C_Ji+o → C_Jo

アジ＋オ → アジョ《味を》

マキ＋オ → マキョ《薪を》

クチ＋オ → クチョ《口を》

—C_Jo の融合が最も普通であるが，—$C_J$io と —C_Jo の中間段階と

もいうべき —Cʲio も聞くことがある。

ハナシ＋オ→ハナシオ [hanaʃio]《話を》

エ《へ》(イともしばしば発音される)

ヨコスカエ，ヨコスキャー　ソカイ　シタ↘ラー。

横須賀へ，横須賀へ疎開した。(女・明中→筆者。ヨコスキャーは融合形で言いなおしたもの)

ノーキョーイ　ツトメテ　オジャルッティー↘ヤーッテ　ハナシダラ。

農協へ務めていらっしゃるそうだという話です。(T→M)

融合形

—Cʲi+e/i → —Cʲie/—Cʲi:

トンネルグチ＋エ/イ → トンネルグチエ／トンネルグチー《トンネル口へ》

ウチ＋エ/イ → ウチエ／ウチー《家へ》

キシ＋エ/イ → キシエ／キシー《岸へ》

—Ca+e/i → Cʲa:/—Cʲæ:

ハマ＋エ/イ → ハミャー [-mʲæ:]《浜へ》

ヤクバ＋エ/イ → ヤクビャー [-bʲæ:]《役場へ》

オガサワラ＋エ/イ → オガサワリャー [-ɾʲæ:]《小笠原へ》

ソバ＋エ/イ → ソビャー [sobʲæ:]《そばへ・隣へ》

—Co+e/i → —Cʲie/Cʲi:

ゴミバコ＋エ/イ → ゴミバキエ／ゴミバキー《ごみ箱へ》

アスコ＋エ/イ → アスキエ／アスキー《あすこへ》

トコロ＋エ/イ → トコリエ／トコリー《ところへ》

ソレ＋エ/イ → ソリエ／ソリー《それへ》

—Cɯ+e → Cʲi:

ウク＋エ/イ → ウキー《あそこへ》

シャン《～の方へ》(チャンとなって先行語詞と熟合することもある)

アスコノ　シオワ　オキシャンデモ　モッテ　ハシロ　ワケカ　ノァ↗。

あそこの〔＝末吉の〕の潮は沖の方へでも〔飛込自殺者の死体を〕もって走る訳かねえ。(男・昭初→男・昭初)

融合形

コッチャン《こっちの方へ》

アッチャン《あっちの方へ》
ウッチャン《あっちの方へ》
ソッチャン《そっちの方へ》
ドッチャン《どっちの方へ》

ギャー《〜の中へ》

コツギャー　クヮ　'キャーロニ……

お骨〔箱〕の中へ，ひょこんと，帰りぎわに〔帽子などの遺留品を入れたんだよ〕。(M→T)

ギャーは所有所属物を表示する機能名詞ガと前出の無活用助詞エ/イ《へ》との融合と考えることができるのかもしれない。次の例がこの点を考える上で参考になるだろう。

ヒエデ　ノァ　マンマデ　アツケー　タメンカ　アノー　ワイシャガモ　ツイテ　アロ　ガ。オメーシャノガエニ　オマエシャガエモ　カイスー　ヨケー　クスリオ　カケルダラ。

寒さでね，今まで暖冬のためか，あのう，私たちのも〔大根に虫が〕ついているが。あなたたちのへも回数を余計に薬をかけるのだ。(男・明後→男・昭初)

デ《で》

コッチノ　ミチデー　マサミガ　イゴッテ　ワソイテ……

こっちの道で正身が働いていたので……(M→T)〈場所の表示〉

サワジーオ　タノン'デー　ヤクバデ　'デー。

沢爺を頼んで，役場でで。(M→T)〈行為主体の表示。ヤクバデデとデが一つ余計のようにも思えるが，言い間違いではないと思う。「頼んだのは役場で，私ではない」という気持が表現されている〉

デンワデモ　ニカイモ　シャベッテ　ノァ　ワイト。

電話でも2回もしゃべって，私と。(T→M)〈手段の表示〉

カイゴーデ　コッチャン　オジャロ　ワ。

会合でこっちの方へいらっしゃいますよ。(T→M)〈理由の表示〉

融合形

ジャー←デ＋ワ　テガミジャー《手紙では》
　　ワギージャー《我家では》

カラ《から》

ムコーカラ　オジャル　ナカマガ……

むこうからおいでになる人たちが……（T→M）〈行為の出発点の表示〉

ソレカラ　イ↓クニン　コッタ　カ……

それから幾人〔樫立駐在の巡査が〕変ったか……（M→T）〈時間的判断の基点の表示〉

シューセン　ナッテカラ　イママデー……

終戦になってから今まで……（T→M）〈時間的判断の基点を表示。動詞の活用成態に後接した例〉

ワイモ　コノメャー　ヨシミツアニーカラ　ソノ　ハナショ　キットチー……

私もこの前，義光兄からその話を聞いて……（T→M）〈情報源の表示〉

ヨリ《より》

↓ワギーノナカマヨ↘リー　フタツキハンーオソ↘クー……

私の家族より2月半遅く……（T→M）〈比較の対象を表示〉

↓ワレヨリ　ホカニャー　↘ダーレモ　↘ミーンナ　↓ナッケ　ジャ。

私より外には誰もみんないないよ。（M→T）〈除外の対象を表示〉

マデ《まで》

ソノ　ボーシノ　アロァ　トコロマデワ，↘シェギマ↘デー　ダンダンクズレ……

その帽子のあったところまでは，端までだんだん崩れ……（M→T）〈現象・作用の到達点の表示〉

マダ　アタマカラ　イママデー　ヒッカスロァ　コトガ　ナッキャ……

まだ頭から今まで忘れたことがない……（T→M）〈時間的継続の到達時点を表示〉

↓ハカマデモ　ツクッテ　オイテ　モラッテー……

墓までも作っておいて貰って……（T→M）〈行為動作の限界の表示〉

モ《も》

ダレモ　ハラ　ミナ　マルッデ　シマッテ　サ。

誰ももうみな死んでしまってさ。(M→T)〈強意表現〉

オラモ　スグ　ヤーテー……

あの人もすぐやってきて……（T→M)〈加入の表示〉

ワレモー　コワクモ　アニモ　ナカロァ　ガ。

私も恐わくとも何ともなかったが。(M→T)〈強意表示〉

ボーサマモ　キテ　ゴージャッテモ　ヨカンノー……

坊様も来てごらんになってもよかろう……（M→T)〈非難の気持が加味された強意表示〉

ト《と》

ジュンサガ　ヤクバト　ソーダンシタ　カ　イッカ　ソノ　アス。

巡査が役場と相談したか，いつか，その明日。(M→T)〈共同行為の表示〉

シチョーチョーニー　あから　あな　ケーブト　イシャト　サンニンガ　オジャッテ……

支庁長に，それから，あのう，警部と医者と3人がおいでになって……（M→T)〈列挙の機能〉

デモ《でも》

サイゴノ　スガトァデモ　ミタ　カー。

最後の姿をでも見たか？（T→M)〈可能性の表示〉

ニオーサマデモ　ミログァン　ガンジョーナ*　シト……

仁王様でも見る様な頑丈な人……（T→M)〈例示機能〉

*「ガンジョーナは共通語的である。ガンジョードァが本来の樫立言葉である」(K. S. 氏)

グリャー《ぐらい》

コーヨーデマ　グリャーニャ　ツケ　タモールダロー……

公用手間ぐらいにはつけてくださるだろう……（M→T)〈可能的限界の表示〉

シタクソァ　カリ　ソー　グリャー　ドァト　ノァ。

下草刈りをなさるぐらいだとね。(T→M)〈概略の程度を表示〉

ダケ《だけ》

カクニン　サレタッテ　ユー　コトダケワ　レンラクシタイト　ユァ

イテ　サ。

確認されたっていうことだけは連絡したいと言ったからさ。（M→T）〈限定・強意の表示〉

バッカリ《ばかり》

ホネバッカリデ　ノア。

〔発見された遺体は〕骨ばっかりでね。（M→T）〈限定表示〉

ソリー　カンギャーテ　ˌバッカリ　シタンヌイテ……

それを考えてばかりおられるでしょうから……（T→M）〈限定表示〉

アテ《宛》（アテン，アテニとも）

ヤクビャー　アテ　テガミガ　キータシタロー　ガ。

役場あて手紙が参りましたでしょうが。（T→M）〈宛先の表示〉

アテン，アテニは，名詞＋ニと見ることもできるが，ここでは熟合とみてアテの異形とする。

ガテラ《がてら》（古くはガツラ）

ソリエ　オマイリガテˌラー　ゴクヨーガテラ　コッチャン　オジャロワ。

それへお参りがてら，ご供養がてら，こっちの方へおいでになりますよ。（T→M）〈随伴行為による便宜を表示〉

トカ《とか》

イロイロ　タバコノ　スイガラトカ　マッチトカ……

いろいろ，煙草の吸殻とかマッチとか……（M→T）〈混数列挙の表示〉

ˌヘキユーカイトカ　アニユーカイトカ　シヤロァ*　ˌガー。

碧友会とか，何友会とか言っておられたが。（T→M）〈不確定表示〉

* 「動詞ス（ル）がこのように《言う》の意味で用いられることは，樫立在住時代（明治後期より大正前期）には聞かれなかった」（K. S. 氏）。13頁の注を参照。

ダカ《だか》

タバコノ　スイ　ガケダカ　アンダカ　ウグゥンドァ　モノガ　アロァ　ガ。

煙草の吸いかけだか，何だか，あんなようなものがあったが。（M→T）〈不確定表示〉

ダノ《だの》

ˌアッˈチャーガラダノ　ˌクˌサダノ　アニカ　ノァ　アッテ……

あじさいの木だの，草だの，何かね，あって……（M→T）〈混数列挙の表示〉

ママ《まま》

キルイノ　ウグァンドァ　モノ　ソノ　ママ　オジャリ　ヤ。

衣類のようなもの，そのままございましたか。（T→M）〈無欠損状態の表示〉

グァン《様態・意図・勧誘》（様態・意図の表示の場合はグァニとも）

形副詞の後部要素としてのグァンとは別個に，その機能に着目し，助詞としてのグァン（グァニ）を立てる。動詞に後接する場合は—o/—oʌ̃（稀に—ɯ）活用形の後に置かれる。

ニオーサマデモ　ミログァン　ガンジョーナ*　シト……

仁王様でも見るような頑丈な人……（T→M）〈様態〉

* 無活用助詞デモの項（35頁）の注を参照。

アスコエ　イコァ　ハナショ　ショグァン。

あそこへ行った話をしましょう（女・大→女・明中）〈この文例は勧誘とも意図ともとれるのであって，その境界は本来明確に引かれているわけではない。現に，この発言の聞き手であった教示者は，これを「話をするように」と共通語に訳して説明している。即ち，相手に「～するように」と言う場合，話し手も一緒にするならば「～しましょう」ということになるわけである。意図か勧誘かは文脈と場面に依存する〉

ヨワサセジ　ショァテ　グァニ　ミズ　ツグッテ　ヨ　ワケダラ。

酔わさせないようにと，水を〔島酒に〕注ぐっていう訳だ。（女・明中→筆者。老人会で）〈ショァテ自体で意図・目的を表示し得るのでグァニは用いなくてもよいが，意図表示のグァニをていねいにつけた例である〉

ナナセンエン　ハッセンエン　グァンヌーˌワー。

7千円，8千円のようだろうよ。（女・明中→女・明後）〈様態〉

ショアテ（ショァテ，シャーテとも）《意図・目的》

ショアテは，動詞スの活用形と助詞テとの結合が融合したものと考え，

分析を施さず一つの助詞とする。

ジブン↘ワー　マー　イーテ　ユーニ　ワレニ　タベサセショアテ。

私はいいというのに〔姉は〕私に食べさせようと。（女・明中→筆者）

ガンジツカラ　ガマンシテ　コリエ　オロァショァテ　ミチョ　ミルト　ジャージケ　キモノ　キテ　ヒトノ　トールドァ　ジャ。

元日から頑張ってこれを織ろうと，道を見るときれいな着物を着て人が通るんだよ。（女・明中→女・明後）

ドーニ（簡略形としてドン・ドとも）《～けれども・～なのに》

動詞の—(ラ)レ形・形容詞の—ケ形・名形詞，等に後接されて譲歩を表示する。

ダレカラカ　ウスウスニ　クッン　キカラレドーニ，ハッキリシタコトー　オビーワ　サズ。

誰からか，うすうすに，こう聞いたけれども，はっきりしたことを知ってはいない。（M→T）

アツイ　ウチニ　カエレバ　ヨケドーニ　ノー↗。

〔食べ物が〕熱いうちに帰ってくればいいのにね。（女・明中→筆者の妻）

ニ《～のに》

オメャーシャー　ヌ　コタツモ　アッタロァニ。「サムケニー↗。

あんたがた，そら，炬燵もあったのに。寒いのにまあ。〔縁側に長いこと坐らせて〕（女・明中→筆者夫婦）

イテ《～ので・～で(理由)》

動詞の —o/—oΛ 形・形容詞の—ケ形・活用助詞ダラのドァ形，等に後接する。

オクサンガ　キャーログッン　キャーログッン　ソイテ　キャーリヤレ。

〔筆者の〕奥さんが帰りましょう，帰りましょうと言うから，お帰りください。（男・明後→筆者。老人会の終り頃）

デ《～ので(理由)》イテほどは頻用されていない。

ドロボシトァデ↗　シッチレテ。

泥棒したんで，知れて。（女・明後→女・明中）

カラ・ノデも時に使われるが，共通語を使いたくなるような情況下においての場合である。

ナガラ（ナガラニ）《～しながら》

コココデ　イトチー　マルビナガラ……

ここに坐っていて，死にながら……（M→T）

（ッ）ト（ッ）チー（交替形として（ッ）ド（ッ）チー）《～してから・～したまま》

ミンナ　シンデ　シマッテー，ウショ　カットッチー，ミンナ　ギョクサイデ。

みんな死んでしまって，牛を買ってから，みんな玉砕で。（女・明中→筆者。サイパンの八丈移民の悲話を語る）

シ《～だし・～するし》

ハッキリ　ジューショモ　ワカルシー。

はっきり住所もわかるし。（M→T）

マサミサンモ　ダレモ　ミーンナ　マルビ　ヤッタシ　ノァ。

正身さんも，誰も，みんななくなられましたしね。（T→M）

テ（交替形としてデ）《て，で》動詞語幹と融合。

ヤカンニ　ワッテ　アル　カ，ドーダ　カ，オユーガ。

やかんに沸いているか，どうだか。お湯が。（女・明中→筆者）

ナンダカ　スエヨシノ　シトガ　ウミー　トビコッデ　シギャーガ　アガッタ　カノーァ。

何だか末吉の人が海へ飛び込んで，〔その後〕死骸があがったかなあ。（女・明中→女・明後）

ハガ　モンデ　タベラレナイ。ヤワーコケヨ　ヨッデ　アガリ　ヤレ。

〔私は〕歯がもげて食べられない。柔らかいのを選って召上りなさい。（女・明中→筆者夫婦。薩摩芋の空揚げを筆者らにすすめながら）

なお，カク《書く》についてはカッテとカケテの2形がある。

コリャー　アンテ　カケテ　アル，コレニャー。

これには何て書いてある。これには。（女・明中→女・明後）

ムズーカシク　ノァ　コマーカク　カッテ　ノァ。

むずかしくねえ。細かく書いてねえ。（女・明中→筆者。ある研究

所の所員たちが調査にきてむずかしいことを細かく聞いて書いていったということ)

タリ（交替形としてダリ）《たり・だり》動詞語幹と融合する。

クワバ　モッダリ，ヤメャー　ミッタリ……

桑葉をもいだり，畑へ行ったり……（女・明中→筆者）

バ《ば(条件・勧奨)》

ワサバ　ワセ。

行くのなら行きなさい。（女・大。筆者への説明のための例文として。）〈対等か目下へ〉

センセー，オミャーモ　ダンダン　ウチャーレバ。

先生，あなたもだんだん歌われれば〔どうですか〕。（男・明後→筆者。老人会で）〈ウチャーレはウチャー《歌い》とヤレ《敬意補助動詞》との融合〉

このようにバで言い切りとして勧奨表現の文を作ることが多い。

引用表示の助詞トと動詞ユー《言う》のイヤー形《言えば》とが融合してチャ(ー)となることがある。

ウキー　チャー　アソコエテ　ユー　コトダラ。

「ウキー」と言やあ，「あそこへ」と言うことです。（女・明中→筆者）

ト《と(条件・同時継起・勧奨)》

オメーシャーガ　ソッン　カクジツニ　ウメテ　タモーリ　ヤル↓トー

コツワ　チャーント　オジャルダローニ↗。

あなたたちが，そのように確実に埋めてくださいますと，骨はちゃんとございますでしょうね。（T→M）〈ワを加えてトワとなることも多い〉

ヤスミ　ヤル　トー。／アガリ　ヤル　トー。

お休みなさい。／おあがりなさい。（女・明中。筆者への説明のための例文として）〈バと同様，勧奨表現となっている〉

(ッ)テ（トとも）《と(引用)》

オリエ　ソグッン　テ　ユー　ワケデ……

万事そのようにと言う訳で……（T→M）

↘

オー。オラダラ　トモアラ。

ああ。あの人だと思った。(M→T)〈トモアラはト・オモアラの融合〉

ゾーテ《と・だと(引用)》

マサカズワ　オーカゴーノ　サケ　マズケ　ゾーテ　イッテ……

雅一は大賀郷の島酒はまずいと言って……(女・明中→筆者)

ッチー《そうだ(伝聞)》(ッチエとも)

アニモ　ナカッチー　ヤ，ドロボーショモノワ　アニモ。

何にもないそうだ，泥棒するものは，何も。(女・明後→女・明中)

ヤラ《やら(伝聞)》

アベカーバショ　トーレバ　ソコ　ゾーテ　ヤラ　サー。

安倍川橋を渡れば〔すぐ〕そこだとやら〔とかで〕さ。(女・明中→女・明後)

ッチ《っけ(回想)》

カネモ　ジッセンダカ　ニジッセンダカ　アル　フー　ダッチ　ガ。

金も10銭だか20銭だかある風だっけが。(M→T)

ッキエ《っけ(回想)》(ッキーとも)

ドージュセンシエ　ダラッキエト　オモー　ワ。

〔その頃の村長さんは〕道寿先生だっけと思うよ。(M→T)

ヌー(交替形としてヌ。その他異形としてヌ，ノーとも)《だろう(推量)》

トシャー　キヨシヨリ　ヒトツ　フタツ　ボーカンヌー　ワ。

年は清より一つ二つ上だろう。(女・明中→女・明後)

アダニ　タカケモ　ヤスケモ　アンヌイテ，　オノ　セージンシキノ　ナガタモトワ　ノー。

やっぱり高いのも安いのもあるだろうから，あの成人式の振袖はね。(女・明中→女・明後)

オ《意志》

オは先行する動詞の—o 形の末尾の—o を引き伸ばす形で融合する。

オリエ　キロー　カ　ノーァ。

あれを切ろうかな。(女・明中→筆者。枯れたロベの葉を指して)

〈キロ・オの融合と考える〉

シラベテ　ミロー。ミロー　ジャ　ト……

調べて見よう。見ようよと……(M→T)

ンニャ(ー)《んだよ》

ニャーはニワのことであるとの説明を教示者から受けたことがしばしばあるが，結合から融合へと進展したものと考えてもよい場合が多いようである。常に文末に来るので，文末詞として扱うことも可能である。強い断定や主張などを表示する。

マサカズワ　サケ　モラウダ↘ロー，オボン　ショーガ↘ツー。ソイデコケー　モッテキテ　オカンニャー。

雅一は酒を〔人から贈り物として〕貰うだろう，お盆とか正月に。それでここえ持ってきておくのだよ。(女・明中→筆者)

(ッ)チャー《っけが(やや不確かな回想)》

ウシメー　ツナッド↘チー　ソノママ　ヨークー　イッピャー　ヒッツッ↘チャー。

〔〇〇さんは仕事から帰ってくると〕牛をつないで，そのままよく一杯〔島酒を〕ひっかけたっけが。(男・昭初。筆者への説明のための例文として)〈高年層では使わないという〉

(この章未完。次号へ続く)